十全同窓会会報 180

2022／1

目　次｜CONTENTS

新年のご挨拶……02
就任挨拶……03
受賞……06
第3回鈴木大拙-西田幾多郎記念
金沢大学国際賞授賞式および記念講演会…12
金沢から世界へ発信……13
学会報告等……14
久住治男名誉教授を偲んで…16
追悼赤祖父一知先生……17
病院紹介……18
教室だより……20
支部だより・同窓生の消息…22
Student Doctor
認定証授与式……24
金沢大学医学生と
「生と死」を考える……26
学生コーナー……28
第15回金沢大学
ホームカミングデイ開催…29

新 年 の ご 挨 拶

十全同窓会会長
山本　　健

新年明けましておめでとうございます。十全同窓会会員の皆さまにおかれましては、ご健勝に新春をお迎えのこととお喜び申しあげます。年頭に当たり、ご挨拶を申しあげます。

新型コロナウイルス感染は、国内のワクチン接種が進む中、2021年8月の第５波をピークとして急速に収束しつつあります。わが国と同様にワクチン接種率が高い欧州や韓国で再びコロナ感染が増える中、ほぼ全国民が外出時にマスクを着用し、検温と手指の消毒を心掛けると云った、日本人の協調性、同調性がよい方向に働いていると考えられます。臨床現場でコロナ対応に奮闘された医師・医学研究者各位のご尽力も、コロナ禍を収束させる大きな力となったことは間違いありません。

「十全同窓会会員名簿1875~2021」が既にお手元に届いていることと存じます。コロナ禍のため５年ごとの改訂が更に１年延びましたが、土屋弘行同窓会理事長を中心に、名簿編集委員各位、ならびに学年協力担当者各位のご努力により、無事に発刊することができました。わたしの同期（昭和48卒）には長らく消息が不明の同級生が居られましたが、協力担当者をお引き受け下さった八野田実先生のご努力で、消息を確認することができました。これはほんの一例ですが、各学年協力担当者のご苦労は筆舌に尽くしがたいものがあったことと拝察します。深甚の感謝を申しあげます。

医学類学生の教育は、新型コロナウイルス感染を避けるための対策を行いつつ、対面による講義及び実習に復帰しています。臨床実習についても、一部の区域（手術室等）を除き、原則として対面による実習を実施しています。このままコロナが収束すれば、以前のような対面型の教育が全面的に可能になると期待できます。この間、感染対策を盛り込んだ授業・実習の方法を整えられた教育委員長山本靖彦教授、また学類長杉山和久教授のご尽力に深く感謝いたします。

昨年10月31日に行われた第49回衆議院議員総選挙で、千葉13区から立候補された、十全同窓会会員、日本医科大学救急医学特任教授、松本尚先生（昭和62卒業）が見事当選されました。新制金沢大学初の快挙です。十全同窓会千葉支部の後押しが大きな支えになったものと思います。松本先生はヘリコプター救急を初めとする救急医療がご専門ですが、今後は「国手」として、国政の場で我が国の医療の発展のためのご活躍を期待します。また、昨秋は受勲、受賞のお知らせが相次ぎました。具体的な内容は別項に譲りますが、全国各地の同窓生のご活躍を心から嬉しく思います。

私ごとですが、最近スマート・ウオッチ（Apple Watch 7）なるものを手に入れました。新しい電子機器の使いこなしは既にハードルが高いのですが、神経回路の錆落としのつもりでコツコツ学習し、まずは「手洗いタイマー」が使えるようになりました。20秒間手洗いをすると、「お見事です！」とか「素晴らしい！」とか、その時々で異なるお誉めの言葉が時計の文字盤に表示されます。この手洗いタイマー、ウオッチを腕に装着していれば自動で秒読みを始めますが、手洗いの動作だけを真似ても知らん顔。水の流れる音を組み込みマイクが拾い、加速度計で前腕の動きを捉えて、その双方が揃って初めて秒読みを開始するそうです。相当に賢い腕時計ですが、水を流しながら顔を洗うと、騙されて秒読みを始めてしまうところはご愛敬。そのほか高齢者ご用達の「転倒検知機能」というのもありますが、幸いこちらにはまだお世話になっておりません。4センチ角の腕時計に、介護して貰っているような気分です。

本年の干支は「虎」。「董奉救虎、爾後虎守董奉的杏林」の時代から、虎は医学の守護神です。本年が会員の皆さま、金沢大学医学類・医学系ならびに十全同窓会にとり幸せな一年になりますことを祈念し、新年のご挨拶といたします。

就 任 挨 拶

宮本　敏浩　博士

多様性に富む医局に

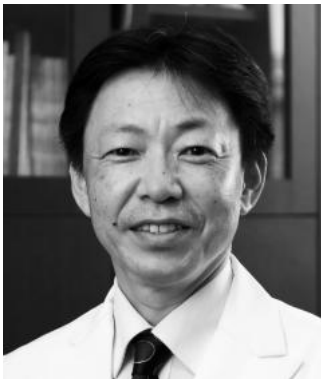
私は1965年福岡市博多区にて出生し、1990年九州大学卒業後に、九州大学第一内科に入局しました。現在に至るまでは1972年九大から金大三内に入局され、その後15年間に渡り服部先生と共に骨髄移植の開発に専心されました。その経験を福岡に持ち帰り、金沢から10年遅れて九州で骨髄移植を開始され、私もその教えを受け継がせていただきました。非常に強いご縁を感じています。

金沢大学血液内科は再生不良性貧血・造血不全、凝固線溶異常症の分野でトップクラスの業績があります。今後は幹細胞研究と融合させ、「幹細胞異常に起因する血液疾患の病態解明と新規診断・治療法の開発」を目指す所存です。有望な若い力に溢れた多様性に富む医局の形成を目標としています。金沢大学および十全同窓会の先生方にはご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

金沢大学血液内科学教授に就任

内科一般を基礎に、血液内科の臨床・研究に従事して参りました。“bedside to bench, bench to bedside”双方向研究を行うことが目標であり、基礎研究では、九大およびスタンフォード大で、造血の分化機構、白血病幹細胞の生物学的特性とその標的治療の開発を行ってきました。臨床研究では、造血幹細胞移植および新規分子標的治療を臨床展開しています。

金沢大学・旧第三内科は、九大一内の血液研究室の開祖者・服部絢一先生が、1969年初代教授として設立された講座です。服部先生は1975年から日本でいち早く同種骨髄移植を導入され、ここ金沢で1978年我が国初となる同種移植に成功され、日本の骨髄移植パイオニアとして広く知られています。私の恩師・原田実根先生（第九代・九大一内教授）



矢野　聖二　博士

夢は骨太の呼吸器内科医の育成

令和3年11月1日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系呼吸器内科学の教授を拝命しました。

金沢大学医薬保健研究域医学系呼吸器内科学教授に就任

私は、平成2年に徳島大学医学部医学科を卒業し、徳島大学医学部第三内科学講座（現在の呼吸器・膠原病内科）に入局し、一般内科・呼吸器内科の研鑽を積みました。平成9年から2年間米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンターに留学しがん転移研究を行ったのち帰国し、平成12年から開始されたEGFR阻害薬の企業治験により分子標的薬に出会いました。奏効例におけるその劇的な腫瘍縮小効果を目の当たりにし、がんの薬物療法が激変することを確信しました。一方で、分子標的薬が著効しても耐性により数年以内に必ず再発してしまうことも思い知らされました。平成19年にご縁があり金沢大学がん進展制御研究所腫瘍内科の教授として赴任し、金沢の地では肺がんの分子標的薬耐性の克服を目指した研究や診療を行ってきました。

呼吸器内科では、藤村政樹先生や笠原寿郎先生のリーダーシップの下に築いてきた気管支喘息や肺がん、間質性肺炎、慢性閉塞性肺疾患（COPD）をはじめとする幅広い呼吸器疾患の診療や教育体制を発展させるとともに、肺がんや良性肺疾患の先進的な治療や基礎・臨床研究により注力し、呼吸器内科を志す若い医師が一人でも増えるよう力を尽くす所存です。昨今、命に直結する呼吸器の診療を担う呼吸器内科へのニーズが高まっています。呼吸器疾患の基礎から臨床までを理解し、質の高い診療を実践できる骨太の呼吸器内科医を育て、関連病院の先生方と連携して北陸の呼吸器医療を支えてまいります。

十全同窓会の諸先生方には今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

藤野　　陽　博士
（平成5年卒業）

心筋症研究と多職種医療人材の教育に尽力

令和3年10月1日付で、金沢大学医薬保健研究域保健学系・看護科学領域臨床実践看護学講座の教授を拝命いたしました。

金沢大学医薬保健研究域保健学系・看護科学領域臨床実践看護学講座教授に就任

私は平成5年に本学医学部を卒業後、竹田亮祐教授が主宰されていた旧第二内科に入局しました。馬渕宏教授と清水賢巳助教授からご指導を受け、心筋トロポニンT遺伝子変異に伴う肥大型心筋症の遺伝学的検査を行い、詳細な臨床像を報告して平成11年に学位を取得しました。平成12年から、米国・ハーバード大学遺伝学部門Seidman研究室に留学しました。平成15年に帰国後、本学附属病院・総合診療部と循環器内科に助手として勤務した後、平成17年に講師として保健学系に異動しました。同系長・高田重男教授、大竹茂樹教授をはじめとして看護科学領域の小山善子教授、関秀俊教授、城戸照彦教授、中谷壽男教授からご指導を受けました。看護学生・医学生の教育に従事しつつ、平成18年からは循環器内科学・山岸正和教授ご指導のもと、厚生労働省循環器病研究委託費事業「心肥大に伴う心筋不全の発症・増悪に関わる要因に関する研究」を遂行しました。平成30年改訂の心筋症診療ガイドライン作成では班員として学会活動に貢献し、循環器内科学・高村雅之教授のご指導のもと、令和2年からは基盤研究B「分子疫学的コホート研究による遺伝性心血管疾患のリスク層別化・病態解明・治療薬探索」を進めています。そしてこの度、臨床実践看護学講座教授・昇任の辞令をいただきました。今後も心筋症研究を進めつつ、看護学・医学を中心とした多職種医療人材の教育に尽力する所存ですので、十全同窓会の先生方には、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

秋の叙勲

旭日小綬章
諸岡　信裕（昭和48年卒業）

旭日双光章
工藤　學而（昭和40年卒業）

瑞宝双光章
宮木　幸彦（昭和37年卒業）
藤田　武史（昭和39年卒業）
米野　邦彦（会員Ⅱ）

教授退職記念講演会のお報せ

謹　啓　　時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます

さて 金沢大学医薬保健研究域医学系（消化器内科学分野）金子周一教授には令和4年3月31日をもって医学系教授を御退職されます

つきましては 左記のとおり記念講演会を挙行することとなりましたので ご案内申し上げます

令和4年1月吉日

謹　白

金沢大学医薬保健研究域医学系長
杉山　和久

記

記念講演会

日　時　令和4年3月19日（土）　午後3時30分　から

場　所　金沢大学宝町キャンパス　十全講堂1階ホール

（記念講演会後の記念式は行いません）

事務担当　医薬保健系事務部総務課総務係
（電話番号　076−265−2100）

受　　賞

日本医師会最高優功賞を受賞して

茨城県医師会前会長・茨城県病院協会会長・茨城支部長
諸岡　信裕
（昭和48年卒業）

令和3年11月1日、日本医師会館で開催された「日本医師会設立74周年記念式典ならびに医学大会」において、「医師会活動を通じて地域における医療・介護提供体制の確立に貢献した功労者」として、日本医師会最高優功賞を受賞致しました。これも、十全同窓会の諸先生方の暖かいご指導とご支援の賜物と深く感謝しております。

私は、昭和48年に金沢大学医学部を卒業後、千葉大学医学部第3内科（循環器内科）に入局し、その間、助手、講師、医局長として、後輩の教育指導を行いながら、金沢大学医学部卒業の優秀な後輩を多数入局させることができました。その後、茨城の病院に戻り、地域医療の切実な現場に遭遇する事になりました。高齢者医療、認知症対応等を勉強するために、介護支援専門員の資格を取り、医療・介護の現場を直視すると共に、平成12年より茨城県医師会の役員となり、理事、常任理事、副会長を経て、会長を平成28年から令和2年まで務め、約20年間の長きにわたり、茨城県の医療と介護に直接携わる事ができました。その間、団塊の世代が全て後期高齢者になる2025年問題に対して、「茨城型地域包括ケアシステム推進センター」を立ち上げ、医療・介護分野における多職種連携の重要性の踏まえ、四師会（医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会）の連携強化を進めました。しかし、今の医療の現状において、新型コロナウイルス感染症の第5波は収束傾向ではありますが、第6波の懸念もあり、さらなる、ワクチンのブースター接種、治療薬の開発、感染防止対策の徹底等が急務と思われます。我々医療従事者の責務はそこにあるものと思われます。十全同窓会の皆さま方には、いろいろなご支援やご指導をいただき、大変有難う御座いました。

なお、令和3年11月3日には、小生、旭日小綬章を受章致しました、これも諸先輩方のご支援の賜物でもあります。心から、御礼申し上げます。

日本糖尿病合併症学会 Distinguished Investigator Award受賞

公立小松大学学長
山本　　博
（昭和50年卒業）

令和3年10月8～9日に、びわ湖大津プリンスホテル（現地会場）とWeb配信を併用したハイブリット形式にて開催された「第36回日本糖尿病合併症学会年次学術集会・第27回日本糖尿病眼学会総会」にて、公立小松大学学長の山本博先生にDistinguished Investigator Awardが授与されました。

この賞は、日本糖尿病合併症学会の発展、糖尿病合併症研究の進歩ならびに糖尿病とその合併症に関する啓発、福祉に著しく貢献された方に贈呈されるものです。金沢大学関連では2009年に馬渕宏博士（金沢大学名誉教授）が受賞されています。山本博先生は、平成2年に金沢大学医学部教授（生化学第二教室）に着任後、新たに取り組まれた血管生物学研究を基盤に、糖尿病合併症をはじめとする成人病性血管障害に関する研究を推進してこられました。なかでも、糖尿病性血管障害の発生機構について環境因子としてのグリケーション（糖化反応）とその糖化最終産物（advanced glycation end-products, AGEs）、そして、遺伝因子としてのAGEs受容体（receptor for AGEs）という観点から研究を推進され、日本糖尿病合併症学会理事としても永らく学会の活性化に貢献されました。これまでにも、平成19年日本糖尿病合併症学会Expert Investigator Award、平成26年日本糖尿病学会ハーゲドン賞を受賞されています。

教室員一同、これまでの山本博先生の偉業を称え、この度の受賞の喜びを分かち合いたいと存じます。また後進にとりましては、本領域の今後益々の研究発展の重責を感じ、身が引き締まり背筋が伸びる思いです。

（山本　靖彦：記）

令和3年度安田・阪本賞の受賞に際して

金沢大学名誉教授
竹原　和彦
（特別会員）

この度、令和3年度安田・阪本賞を受賞させていただくことになり、大変光栄に存じます。本賞はリディアオリリー財団の設立代表者阪本匡弘氏および元日本皮膚科学会理事長安田利顕教授の皮膚科学への多大の貢献を讃えて設立されたもので、受賞に際して大変光栄に存じます。リディアオリリー記念ピアス皮膚科学振興財団選考委員会様により高くご評価いただいたことを素直に喜び、2021年11月13日東京にて栄えある賞をいただきました。

受賞の理由について、財団理事長小川秀興様からのお手紙に以下の3点が触れられていました。

まずは、強皮症の基礎的研究・臨床的研究についてのご評価です。なかでも、厚労省強皮症研究班の主任研究者を6年間務めたことと2007年に留学時代の恩師であるProfessor E. Carwile LeRoyの追悼国際学会を東京にて開催したことです。これらは、日本の強皮症研究が世界のリーダー的立場にあり、なおかつその中心が今日、皮膚科にあることを示しえたと思います。

次いで、日本皮膚科学会のアトピー性皮膚炎不適切治療健康被害実態調査委員会委員長などの職務で、日本の社会悪であった「アトピービジネス」に対する皮膚科医の戦いの先頭に立てたことです。

三番目に、後進の育成ですが、これについてはたまたま優秀な人たちと目指すべき道を共有できたのがすべてであり、後進の人たちにただただ感謝あるのみです。

最後に、令和2年3月に金沢大学皮膚科教授を定年退職し、残る人生はアカデミックな立場を離れて、臨床の現場で一皮膚科医として患者さん目線の皮膚科診療を今一度修行したいと考え、実践しております。

以上をもちまして、令和3年度安田・阪本賞の受賞の言葉とさせていただきます。

令和3年度日本医師会優功賞を受賞して

医療法人社団和泉会さはらファミリークリニック理事長・
社会福祉法人石龍会理事長
佐原　博之
（会員Ⅱ）

令和3年11月1日に行われた日本医師会創立74周年記念式典において、日本医師会の委員会委員を10年にわたり務めたことを評価していただき、「日本医師会優功賞」をいただきました。

2010年に当時の石川県医師会長の小森貴先生に推薦していただいて、国際保健検討委員会の委員として出向させていただいたのが最初でした。

引き続き2012年に県医師会長に就任された近藤邦夫先生の推薦で医師会将来ビジョン委員会（第二次）の委員として出向することになりましたが、同年日本医師会の常任理事に就任された小森貴先生が同委員会の担当常任理事になったということもあり、はからずも委員長を拝命することになりました。2014年度には同委員会は設置されなかったのですが、2016年に日本医師会の横倉義武会長から、第三次医師会将来ビジョン委員会を設置することにしたので、委員長を務めるようにとご指名をいただきました。さらに、2018年に第四次委員会の委員長にも指名していただき、医師会将来ビジョン委員会の委員長として本庶佑先生が委員長を務められた医師の団体の在り方検討委員会にも加えていただきました。私が委員長を務めさせていただいた第二次から第四次までの医師会将来ビジョン委員会の答申は、ネットでダウンロードすることができますので、ご高覧いただければ幸いです。

また、2018年に県医師会長に就任された安田健二先生に医療IT委員会の委員に推薦していただき、現在二期目を務めています。そして、2020年からは医師会組織強化検討委員会にも参加しています。

多くの先生方のお導きにより、さまざまな機会を頂戴したことに改めて感謝いたします。

受　　賞

北國文化賞受賞

蒲田　敏文
（昭和58卒業）
金沢大学附属病院長

令和3年11月3日の文化の日に、北國新聞社が主催する第75回北國文化賞および第54回北國芸能賞贈呈式が北國新聞赤羽ホールで行われました。私は浅見洋氏（石川県西田幾多郎記念哲学館館長）、平木孝志氏（日本画家）とともに北國文化賞を受賞させていただきました。10月に入って北國新聞社の関係者から北國文化賞に選ばれたとお聞きした時の最初の率直な感想は”どうして僕なの？”というものでした。北國文化賞ですから、文化的の業績を挙げた方が表彰される賞だと思っていました。文化的なことは何もしていない自分が選ばれるのが不思議であったわけです。受賞理由をお聞きすると、選考委員会では新型コロナウイルス感染症が拡大する中、金沢大学附属病院での重症患者受け入れを英断し、診療チーム結成や専用病棟の稼動など医療提供体制の確保に努め、地域医療の中核を担う病院のリーダーとして果たした役割を高く評価して私を選んだとのことでした。このお話をお聞きし、コロナ対応にあたった金大病院スタッフの代表としてお受けすることにしました。

金沢大学附属病院は昨年（令和2年）4月15日から新型コロナ感染症の重症患者の受け入れを開始しました。元々精神科専用病棟であった北病棟を精神科の全面的な協力を得て、ICU病棟として整備し、重症患者を中心に治療を行ってきました。集中治療部の岡島正樹講師（現教授）をリーダーに使命し、医師11名、看護師30名、臨床工学士2名、リハビリ技師1名の総勢など44名からなるCOVSAT（Covid Special Assistant Team）を結成し、懸命に重症患者の治療を行いました。病院長の私は直接患者さんの治療を担当するわけではありません。COVSATが明るく元気に働けるように後方支援に徹することにしました。コロナ病棟内の休憩室、仮眠室、シャワー室の整備、危険手当の支給（おそらく日本一高額）、スタッフの宿泊用アパートの借り上げ等を短期間で実施しました。院内すべての職員からの大きな支援を得てCOVSATは大活躍をしてくれました。のべ100人弱の重症患者を受け入れました。残念ながら亡くなられた方もおられますが、大部分の患者さんは健康を取り戻し、自宅に帰ることができました。改めて金大病院の職員の皆さんに感謝したいと思います。

現在新型コロナ感染症の第5波がほぼ終息し、県内では感染者ゼロが続いています。しかし、新たな変異株（オミクロン）による感染者が海外では急増しています。日本でもこの新型の感染が広まる可能性が指摘されています。金大病院でも患者急増に対応できるように今後も現在の体制を維持していきたいと思います。近い将来に元の暮らしに戻れる時がくることを信じて、受賞の挨拶とさせていただきます。

World Glaucoma Association Special Recognition Award（世界緑内障連盟特別貢献賞）受賞

杉山　和久
（昭和59年卒業）
金沢大学医薬保健研究域
医学系長・医学類長・眼科学教授

この度、World Glaucoma Association Special Recognition Awardを受賞したのでご報告いたします。これはWorld Glaucoma Association（世界緑内障連盟）への多大な貢献があった医師・医学研究者に贈られる賞です。世界緑内障連盟とは、世界各国にある緑内障学会の連盟すなわち共同体です。私は20歳代後半の若いころから、緑内障を専門として、35年以上にわたり緑内障の臨床、研究、そして教育に従事してきました。世界緑内障連盟には日本代表の理事（Board of Governors）として、2016年から2021年までの3期6年間務めてまいりました。Board of Governorsは、世界から9名からなり、アジアから4名、日本からは私1名です。

世界緑内障連盟はWorld Glaucoma Congress（世界緑内障学会）を2年に一度主催し、本年（2021年）は日本で京都での開催予定でしたが、残念ながらコロナ感染症の蔓延のため、完全Web開催でした。世界緑内障連盟は国際学会の開催以外にさまざまな啓発活動をしています。その一つはアフリカにおける緑内障専門の眼科医師の育成です。本年はマダガスカル島から1名の医師を臨床研修のため金沢大学眼科に受け入れる予定でしたが、コロナ禍のため延期となり来年に持ち越されました。また、緑内障の専門誌Journal of Glaucomaを刊行し、私はEditorとして編集や投稿論文の査読を長年担当してきました。さらに、さまざまな緑内障の臨床的諸問題に対してコンセンサスミーティングを開催し、問題点の解決とコンセンサスを形成します。私はそれまで分類や診断基準がさまざまで確定していなかった「小児緑内障の新

分類と診断基準」の作成に携わりました。このような貢献が認められて、受賞に至ったと思われます。

今後も日本や世界の緑内障学の発展のために微力ながら貢献できたらと思います。

2021 APSS-APPOS Best Viewing Award受賞

出村　　諭
（平成7年卒業）
金沢大学整形外科

この度、Asia Pacific Spine Society（APPS, アジア太平洋脊椎外科学会）& Asia Pacific Paediatric Orthopaedic Society（APPOS, アジア太平洋小児整形外科学会）の共同開催となるcombined meetingにおいて、Best Viewing Awardを受賞させていただきましたのでご報告致します。本学会は日本がホストとなり、2021年7月に神戸での現地開催が予定されておりました。しかし皆さまご承知のごとく、コロナ渦の影響によりオンライン中心のハイブリッド開催となりました。その一方で、オンライン中心の演題発表に形式変更になったことにより、開催期間中に多くの視聴を集めたBest Viewing Awardが新設され、私はオンライン学会でのみ成立しうる幸運な賞をいただくことが出来ました。

私が登録したオンライン発表は、“Factors influencing postoperative disc angle in Lenke type 5C adolescent idiopathic scoliosis”という演題です。小児の成長期に発症する思春期特発性側弯症は高度な体幹変形を伴う場合、内固定材を用いた矯正手術が行われています。本研究では側弯症に関して国内で有数の治療施設との多施設研究としてデータを解析し、最適な固定範囲や矯正手技、治療後のリスク因子等の結果を報告させていただきました。オンライン中心の国際学会において、多くの先生方に演題を視聴いただけたことに対して、驚きとともに、大変嬉しく思います。

最後になりましたが、今回の受賞にあたりご指導いただきました共同研究者の先生方、教室の諸先生方に深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第1回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会学会賞受賞

近藤　　悟
（平成11年卒業）
金沢大学附属病院
耳鼻咽喉科・頭頸部外科

この度、第1回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会・学会賞を受賞いたしました。本学会は、前身の日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会と日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会の統合により誕生した学会であり、両学会は横断的な学術内容の中、活発に議論を行う学術的気風の高い学会で、このコンセプトをさらに昇華させるため、業績および学会への貢献度を評価する学会賞が設立されました。

受賞したテーマは、「ウイルスによる頭頸部発癌・転移機構の解明」です。中咽頭に存在する口蓋扁桃、上咽頭に存在する咽頭扁桃はワルダイエル輪を構成する免疫装置で、エプスタインバールウイルス（EBV）に関連する上咽頭がん、ヒト乳頭腫ウイルス（HPV）に関連する中咽頭がんが惹起されます。この狭い領域に異なったウイルスにより悪性腫瘍が発生する機序について研究を行ってきました。上咽頭がんは、EBV癌遺伝子の潜伏膜蛋白１がその鍵を握るがん遺伝子であること、HPVによる中咽頭がんでは、内因性免疫APOBEC3が発がんを誘導する可能性を証明しました。そして、二つの悪性腫瘍の母地が異なるのか、咽頭組織中のウイルス発現を解析することでウイルス組織指向性を検討しました。今後、さらに研究を継続し治療開発につなげていきたいと考えております。

受賞にあたり、ご推薦賜りました金沢大学医学系耳鼻咽喉科頭頸部外科教授・吉崎智一先生、福島県立医科大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科教授・室野重之先生、臨床および研究にご協力いただきました皆さまに厚く御礼申し上げます。

第54回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会優秀演題賞受賞

三輪　真嗣
（平成15年卒業）
金沢大学整形外科

この度、第54回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会で優秀演題賞を受賞しましたので報告させていただきます。

骨腫瘍の診療では、生検による病理診断に基づいて治療方針を決定します。しかし、軟骨性腫瘍では、腫瘍切除後の最終診断が生検診断と異なることがあります。そのため、軟骨性腫瘍において生検診断と画像所見が矛盾する場合、これらの所見を総合的に評価して治療方針を決定します。しかし、この総合的評価には明確な基準がなく、それぞれの医師の判断で診断されています。本研究では、軟骨性腫瘍における各画像所見の有用性を評価し、それらを総合的に評価する方法を検討しました。方法としては、軟骨性腫瘍における各画像検査所見と病理診断の相関を評価し、相関の高い所見に高く配点することでスコアリングシステムを作りました。結果として、さまざまな画像所見が病理診断との間に有意な相関を示すこと、さらに本研究で作成したスコアリングシステムが非常に高い相関をもつことが分かりました。単一施設の研究では症例数に限界がありますが、当科では個々の症例において十分な検査をもとに治療方針を決定しており、豊富な画像データの蓄積により質の高い研究ができました。この研究結果を臨床で活かしていくと

受　　賞

ともに、これからも個々の症例において十分な検討を行い、さらに将来の研究に貢献できるよう努力していきたいと思います。

今回の受賞にあたりご指導いただきました土屋弘行教授をはじめ、骨軟部腫瘍の診療に関わっていただいた先生方にこの場を借りて深謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

日本腎臓学会 Young Investigator Award受賞

大島　　恵
（平成22年卒業）
金沢大学大学院腎臓内科学

この度、2021年度の日本腎臓学会Young Investigator Awardを受賞させていただきましたのでご報告申し上げます。今回の受賞にあたり、ご指導いただきました和田隆志教授をはじめ、研究室および共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。

本邦の慢性腎臓病患者は約1400万人と推計され、進行すると末期腎不全や心血管疾患に至ることから、早期に重症化を予測し適切な治療に繋げることが重要です。私はこれまで、末期腎不全の主要な原疾患である糖尿病性腎臓病の病態解明および治療に関する研究に従事してきました。まず厚生労働省・日本医療研究開発機構研究班（和田隆志班長）で集積しました、本邦の2型糖尿病患者4328例の多施設共同コホートを用いて、短期間の推算糸球体濾過量（GFR）や尿アルブミンの変化が末期腎不全を予測する代替エンドポイントとなることを明らかにしました。2018年にはオーストラリアのジョージ国際保健研究所に研究留学する機会を得て、2型糖尿病の大規模臨床試験データを用いて、腎予後予測のためのバイオマーカーや重症化リスクの検討、治療に関する研究を行いました。

これらの研究成果を評価いただき、名誉ある賞をいただきましたことを光栄に存じます。今後も慢性腎臓病の病態解明及び腎予後改善に向けて、努めてまいります。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

第２回 十全医学奨励賞

土屋　俊輔
（平成25年卒業）
金沢大学附属病院眼科

この度「緑内障と概日リズム ―眼圧日内変動のメカニズムを探る―」という研究題目にて第２回十全医学奨励賞を賜りました。

緑内障は世界の失明原因の第２位であり、その罹患率は日本では50歳以上の成人の20人に1人です。現時点での唯一の治療手段は点眼薬、手術などによる眼圧下降ですが、その眼圧は日内変動することが知られており、普段の外来診療における眼圧測定はその日内変動のある一時点を捉えているに過ぎません。緑内障患者ではこの日内変動が健常人と全く違うパターンを示すことや、日内変動幅が大きいほど緑内障が進行することなどが報告されています。よって眼圧日内変動メカニズムの解明や、緑内障発症との関連を明らかにし、新たな治療法の開発にむけて金沢大学眼科学教室では研究に取り組んでいます。我々はまず眼圧日内変動は体内の中枢時計である視交叉上核によってコントロールされていることを示し、さらにはそのシグナル伝達として副腎ホルモン、特にグルココルチコイドが大きな役割を担っていることを明らかにしました。今後もさらなる詳細なシグナル伝達の経路を明らかにし、緑内障の新規治療に繋げるべく研究を発展させるとともに、ヒトにおける眼圧日内変動に関連する因子も解析し、臨床でも活用したく存じます。

今回の受賞にあたり、ご指導いただいている眼科学の杉山和久教授と教室の先生方、またUniversity of Washington, Department of OphthalmologyのProfessor Russell N. Van Gelderに深く感謝申し上げます。十全同窓会の皆さま方におかれましても、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。

1st World Association against Infection in Orthopaedics and Trauma Best presentation award受賞

引地　俊文
（平成27年卒業）
金沢大学附属病院整形外科

この度、1st World Association against Infection in Orthopaedics and Trauma Best presentation award（3rd classified）を受賞致しましたので謹んで報告申し上げます。

私は2015年に金沢大学医薬保健学域医学類を卒業し、金沢大学整形外科医局に入局致しました。また、骨再建・足の外科班に所属し土屋弘行教授、松原秀憲講師のもと創外固定治療、足部疾患の治療に従事しております。

本会は難治性疾患である骨・関節感染症治療についての国際学会であり、第一回目の開催でした。ギリシャでの開催でしたが、コロナ禍のためオンラインでの開催となりました。本賞は難治性感染性偽関節に対する創外固定治療の成績をまとめ報告致しました。感染性偽関節に対する創外固定は骨欠損部を架橋し強固に固定するため感染の沈静化に有用ですが、本研究では、欠損部の再建を創外固定での仮骨延長法で行うことで、再燃なく安全に施行できること、さらに、プレートへ途中で切り替える治療を行うと、装着期間を劇的に減少させることを報告しました。感染巣に対するインプラントの留置は感染の再燃が危惧されますが、当科で開発されたヨードを担持した抗菌作用

を持つインプラントを使用することで安全に、そして短い期間で治療可能となる可能性が見出されました。このように本賞は、基礎研究、創外固定治療に従事された歴代の先生方の苦心とご支援の賜物かと存じます。諸先生方を見習い、私も少しでも難治性骨折の治療に貢献できれば幸甚に存じます。

最後に、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました土屋弘行教授、松原秀憲講師、教室の先生方には改めてこの場を借りて深謝致します。最後に十全同窓会の皆さまのご支援にも御礼申し上げるとともに、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

第44回日本神経科学大会 ジュニア研究者ポスター賞受賞

森田　一矢
（令和3年卒業）
金沢大学附属病院・横浜栄共済病院
臨床研修医

この度、第44回日本神経科学大会ジュニア研究者ポスター賞を、「マウス大脳皮質におけるアクアポリン4の発現はBMPシグナルによって制御されている」の演題にて受賞いたしましたことを謹んでご報告させていただきます。

私は医学類1年より医学研究者養成を目的としたMedical Research Training（MRT）プログラムに参加し研究に取り組んで参りました。アクアポリン4（AQP4）は脳神経系のグリア細胞であるアストロサイトに発現している水チャネルです。AQP4は血液脳関門などを介した脳脊髄液の循環に重要なタンパク質で、脳浮腫にも関与していることから注目されています。しかし、脳内でのAQP4の発現制御メカニズムはあまり明らかにされていませんでした。本研究において我々は、骨形成タンパク質（BMP）が脳内のAQP4の発現を制御していることを見出しました。本研究成果は国際学術誌に上梓され（Morita et al., Scientific Reports, 11, 10540, 2021）、また第44回日本神経科学大会で発表させていただきました。私は脳神経外科に入局させていただきましたので、将来的には本研究をさらに発展させ、脳脊髄液の循環メカニズムや脳浮腫病態の解明に繋げていきたいと考えております。

本研究を行うにあたり、金沢大学医学類在学中から熱心にご指導をいただきました河崎洋志教授、新明洋平准教授および脳神経医学分野の皆さまに心より感謝申し上げます。また寄稿の機会を賜りました十全同窓会の先生方に深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について、寄稿をお待ちしております。

〒921-8640　金沢市宝町13-1
金沢大学医学部十全同窓会　会報編集委員会
TEL. 076-265-2132
FAX. 076-234-4208
Email juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

第3回鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会

日時／令和3年11月25日
場所／ホテル日航金沢

令和３年11月25日、第3回鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会が金沢市内にて開催されました。会報編集委員会の求めにより、創設時から本賞に関わらせていただいた一員として以下報告いたします。

本国際賞は、金沢大学医学部昭和39年卒業の臼井溢先生のご篤志を原資として、本学にゆかりをもつ鈴木大拙と西田幾多郎にちなみ、哲学・思想・宗教を中心とする分野で、国際的に卓越した業績を挙げた研究者を顕彰し、これにより、当該分野の研究の一層の進展を促すとともに、次代を担う若手研究者に対して大きな学問的刺激を与えることを目的に、平成29年6月に創設されました。

第3回受賞者のJames W. Heisig（ジェームズ・ウォレス・ハイジック）南山大学名誉教授（写真左）は、西田幾多郎を中心とした日本哲学研究とその発信に功績を挙げられ、また、国際的な研究ネットワークの形成を通して、この分野の国際的な展開に寄与されたと評価されました。

授賞式では、山崎光悦学長の式辞、盾・副賞・記念品贈呈につづき、臼井先生から本賞の趣旨説明を含むご挨拶がありました（写真右）。

その後、ハイジック氏による記念講演が、「西田哲学との出会い」と題して行われました。講演では、西田幾多郎の著作との出会いから、西田の弟子―西谷啓治らとの宗教哲学研究、西田の思考との格闘、西田の命題とのハイジック氏自身の格闘、数カ国語での翻訳、普遍性への認識などを経て、“Where Nishida philosophy ends, ours begins.”（西田哲学が終わるところでこそ、私たちの哲学がはじまる）との展望に至る、西田哲学へのハイジック氏の「旅路」が語られました。結語の部分は、どの分野の聴衆にも訴える含蓄溢れるものでした。曰く；“Ask questions he did not ask himself and put the universality of his logic to the test in the effort to answer them.”（西田が自分で立てなかった問いを立て、その問いに答えるために彼の論理の普遍性を試す）。そして、そういう問いの中で今日何よりも求められるものは、“care for the earth and for the common good in the deepest sense”（地球への気遣い、もっとも深い意味での共通善への気遣い）だとされました。

西田幾多郎は折にふれ、「学問の主流は金沢から出ている」と学生たちに言ったとされます。石川県専門学校およびそれにつづく第四高等中学校予科で西田と同級だった大拙は、「西田は科学的精神に強い人であった」と記しています（『鈴木大拙全集』第19巻、294頁、岩波書店2001年発行）。古来哲学は学問の根幹をなしてきましたが、わけても西田哲学は、仏教の悟りにもキリスト教の愛にもつながり、また、私たちの医学にも通じる奥深さをもつように思われます。

（山本　博　記）

金沢から世界へ発信

金沢大学
ナノ生命科学研究所

ナノ生命科学研究所・医学系免疫学
華山　力成
（特別会員）

設立の経緯

ナノ生命科学研究所（NanoLSI）は、文部科学省による世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の10番目の研究拠点として2017年に新設された研究所です。WPIは、「世界最高レベルの研究水準」、「融合領域の創出」、「国際的な研究環境の実現」、「研究組織の改革」という４つのミッションの下、国際頭脳循環のハブとなる「世界から目に見える研究拠点」を目指すプロジェクトで、宇宙・生物・材料・エネルギーなどさまざまな分野において、日本を代表する研究拠点が形成されています（図１）。採択拠点には補助金としては最大級の支援（7億円×10年間）が行われるため、各大学がプライドをかけた構想を申請し、採択へのハードルは非常に高いものでありましたが、本学は15大学の申請の中から東京大学とともに選ばれ、大きな話題となりました。

図１　WPI拠点一覧

特徴と目標

本研究所の最大の特徴は、「原子間力顕微鏡（AFM）に代表される走査型プローブ顕微鏡（SPM）技術を基盤とした分子・細胞動態のナノ（10^{-9}）スケールレベルでのライブイメージング」にあります。現在、生命科学研究で最も用いられている蛍光顕微鏡によるライブイメージングでは、蛍光標識を取り付けた蛋白質や核酸などの分子の位置や動きを観ることはできますが、それ以外の大多数の分子の位置や、分子自体の構造変化を直接観ることはできません。また、ナノスケールレベルでの観察に用いられている電子顕微鏡では、真空中の分子の静止構造を観ることはできますが、液中での分子の動態を直接観察することができません。それに対しSPM技術は、液中で分子の位置や構造の変化を無標識で直接動画として観察できる現在唯一の方法であります。これらのSPM技術は、本研究所の安藤敏夫特任教授らが開発した高速AFMや福間剛士所長らが開発した3次元AFMにより世界で初めて実現されたものであり、本研究所はナノ計測学において、世界でも他の追随を許さない実績と人材を有しています。そこで本研究所では、世界最先端のナノ計測学に、同じく本学が強みを持つ医学・生命科学、超分子化学、数理計算科学を融合させることにより、癌などの疾患や老化などの生命現象に関与する数多くの分子・細胞動態（例えば、細胞の分化・増殖、幹細胞性、シグナル伝達、ゲノム動態など）をナノスケールレベルで直接観察・分析し、根本的な理解と精密な制御の基盤を築くことを目標としています。

図２　ナノ生命科学研究所棟

現状と将来展望

設立から4年が経ち、山崎学長・福間所長のリーダーシップの下、本研究所は50名以上の教員を有する本学最大の研究所へと成長しました。主任研究者16名には、インペリアル・カレッジ・ロンドン（英国）、ブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）、マックス・プランク研究所（ドイツ）などから国際的に著名な研究者が加わり、強固な国際連携が構築されています。さらに、国際公募により新進気鋭の若手主任研究者を6名採用し、過半数の主任研究者が50歳以下と比較的若いことが他のWPI拠点にはない特色となっています。2019年には、本研究所のSPM技術を基盤とした「ナノ精密医学・理工学卓越大学院プログラム」が採択され（会報第175号参照）、医学系を中心に70を超える研究室が、“ナノ解析技術を活用して健康課題を解決する卓越した博士人材の育成”に参画しています。2020年12月には待望の新研究棟（延床面積約7千平米）が角間キャンパスに竣工し（図２）、分散していた研究室が集結しました。がん進展制御研究所や自然科学研究棟とも空中回廊で結ばれ、融合研究をさらに加速する研究環境が構築されております。優れた研究業績、多額の外部資金獲得、高い外国人研究者率、本研究所を核とした大学改革など、WPIの4ミッションを高次元で達成し、本年度行われた中間評価においても非常に高い評価（A^{+}）を得ました。「真に世界をリードする研究所」への発展を目指して、本研究所の挑戦は続きます。今後も同窓会の皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

学 会 報 告 等

第１回日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会

日時／2021年6月30日（水）～7月2日（金）　場所／ホテル日航金沢

日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー感染症学会が発足し、第1回大会を金沢大学が担当させていただき、2021年6月30日から7月2日、ホテル日航金沢で開催させていただきました。前身の日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会と日本耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル学会の統合により誕生した本学会の目指すべき方向性をイメージし、学会テーマは「共創！学問新次元 -Integration for Revolution-」としました。

他の学会同様にCOVID-19の影響を受けました。当初4月、金沢市文化ホールで開催予定でしたが、石川県や金沢市などの公共の施設では飲食禁止となりました。そのため、会場の変更とそれに伴う会期の変更に踏み切りました。また、開催方式の選択は、第1回であること、本学会の前身である免疫アレルギー学会の討論重視する文化の継承、さらには、会員のかなりの方がワクチン接種を受けていること、そして、金沢のコロナ感染が6月に入りずっと制御されていたことなどを総合的に考え、現地開催へと踏み切りました。吉と出るか凶と出るか、ある種、実験的な開催様式となりましたが、総参加人数は約350名と予想を上回る結果となりました。

主要プログラムは、特別講演を2演題、教育講演を1演題、5つのシンポジウムおよびパネルディスカッションについて、その分野で活躍される国内の先生方にお願いしました。一般演題は、口演60演題、ポスター61演題、合計121演題を採用しました。

本学会の新企画として、日本耳鼻咽喉科学会において多大なる仕事と貢献をされた先生を対象とした特別賞、現在活躍中で未来の免疫アレルギー感染症を担うことが期待される先生を対象とした学会賞の授賞式と講演が行われました。免疫アレルギー学会の目玉の一つであった若手の登竜門「奨励賞」も感染症の研究を加え、聞き応えのある新次元の奨励賞となりました。

最後になりますが、本学会の開催にあたり力強いご支援をいただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

（吉崎　智一：記）

第31回日本メイラード学会

日時／令和3年10月22日（金）　Web開催

令和2年の昨年の第30回に引き続き、今年の第31回日本メイラード学会（The Japanese Maillard Reaction Society, JMARS）年会も、金沢大学医学系血管分子生物学・山本靖彦が当番世話人となり、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、令和3年10月22日（金）にオンラインでのWeb開催となりました。

日本メイラード学会は、メイラード反応（グリケーション）という切り口から、医学、薬学、農学、食品学などの異分野研究者が一堂に集い、領域横断的に活発な議論を行う学会になります。日本国内でのメイラード反応研究を牽引するのみならず、国際的な学術研究活動にも大きく貢献している学会となります。特に今年は3年に一度開催される国際メイラード反応シンポジウム（14th International Symposium on the Maillard Reaction、ドーハ）が令和3年9月20－24日にWeb開催され、私を含めた多くの日本からの研究発表があり、その直後の国内学会JMARSの開催となりました。

今回も完全Web開催であり、一般演題発表3題、若手研究者奨励賞候補者発表1題、ショートトーク5題という構成に加え、特別講演を設定し、金沢大学ナノ生命科学研究所の古寺哲幸教授から高速原子間力顕微鏡で観察した生体分子の動態計測の最新のデータを紹介していただきました。最後には、特別企画として参加者全員での総合討論会で、今年の国際メイラード反応シンポジウムの報告や今後の国際学会の予定の案内、今後の学会の活動方針などを話し合いました。

来年令和4年の第32回の年会開催は愛知県となります。コロナ禍が終息することを願い、次会こそは対面で開催できますことを全員で願いまして無事散会となりました。

（山本　靖彦：記）

会費免除会員の先生方へのお礼

令和3年度会員名簿改訂事業には、おかげさまで多くの先生方からご協力を賜りました。

多大なるご協力に厚く御礼申し上げます。

久住治男名誉教授を偲んで

泌尿器集学的治療学教授　溝上　敦

先を見据えた医療を目指して

金沢大学医学部泌尿器科学教室の第2代教授久住治男先生におかれましては、令和3年8月21日に享年93歳で逝去されました。

久住先生は、昭和3年3月21日に福井県でお生まれになり、昭和23年3月に第四高等学校理科乙類を、昭和27年3月に本学の前身の金沢医科大学をご卒業されました。昭和34年4月に金沢大学医学部泌尿器科学教室の助手、同年6月に講師となり、昭和34年11月には医学博士の学位を授与されました。昭和40年5月には金沢大学医学部泌尿器科学教室の助教授となり、昭和50年9月から文部省長期在外研究員としてスウェーデン王国カロリンスカ研究所に留学され、昭和51年8月に帰国されました。昭和57年1月から金沢大学医学部泌尿器科学教室の第2代教授に就任されました。その後11年間にわたって泌尿器科学教室の運営、発展に尽くされました。

久住先生は日本泌尿器科学会評議員・理事、日本不妊学会評議員・理事、日本癌治療学会評議員・理事、日本内分泌外科学会評議員、日本パラプレジア学会評議員、日本インポテンツ学会評議員、石川県医師会副会長などの役員を務められたほか、平成2年には第79回日本泌尿器科学会会長となり、平成3年には第13回日本光医学・光生物学学会会頭、日本ハイパーサーミア学会第9回大会長に就任されました。特に久住先生が日本泌尿器科学会会長となられた平成2年の学会は、私が産業医科大学大学院生として、初めて日本泌尿器科学会に出席して学会発表を行ったとても思い出深い学会で、金沢観光会館（現、金沢歌劇座）を中心とする周辺の会場で盛大に開かれたのを記憶しています。久住先生のご尽力により盛大な学会が開かれたのだと思います。私がこの金沢にいるのも何かの縁かもしれません。

久住先生は泌尿器腫瘍学、泌尿器感染症などを多く研究されていますが、その中でも光線力学的治療と温熱療法を精力的に研究されていました。光線力学的治療はヘマトポルフィリン誘導体とパルスレーザー光を用いての膀胱癌治療を行うというもので、膀胱癌細胞を用いての基礎研究を行っていました。現在この治療はまだ行われていませんが、5-アミノレブリン酸を用いた光線力学診断により、目に見えない膀胱癌組織を見えるようにした上で内視鏡的手術（TUR-BT）を行う新技術が最近保険収載されました。当科におきましても積極的にその技術を取り入れて膀胱癌の再発率を低下させていますが、久住先生がこのことを聞けばとても喜んだのではないかと思います。またHyperthermiaも精力的に研究され、基礎実験から臨床試験まで行っていました。浸潤性膀胱癌に対する膀胱温存目的で、放射線療法と温熱療法と化学療法を併用した集学的治療の有用性を発表しておられます。臨床の場においては、久住先生は世界に目を向けて、術前カンファは英語でなされていたと聞いています。現在、日本のすべての医学部が国際的な基準に基づいて医学教育に特化した認証評価受けなければならず、医学教育の中にもなるべく英語を取り入れようという流れになっています。私自身、英語があまり得意ではなく、術前カンファは日本語で行っているのですが、久住先生は本当に先見の明があったのだと思います。

私の久住先生の思い出ですが、私が教授に就任した2016年に西日本泌尿器科学会が山口県下関市で開かれ、会長招宴に呼ばれていました。そのときに、久住先生も奥様と同伴で会長招宴に呼ばれており、私がご挨拶に伺うと、本当に気さくに話してくれました。そこで久住先生は奥様のことを話され、「自分は病気のために体が思うようにいかなくなったけれども、奥様を下関での学会、会長招宴に連れてきたくて、やってきたんだ」と話されました。後日奥様は、本当は久住先生ご自身が来たかったから、奥様が心配で同伴されたのだと私に話してくださいました。久住先生は少し恥ずかしがり屋なのかもしれないと思った出来事でした。また私にもそのときに「教授になってもあまり肩を張らずに頑張りなさい」と声をかけてくださいました。金沢大学出身ではない私に優しく接してくれたのを今でもはっきりと覚えています。

久住治男名誉教授

久住先生は臨床においては非常に厳しい先生だったと伺っています。しかし、久住先生が金沢大学泌尿器科学教室の地盤を盤石なものにしてくれたからこそ、久住先生の指導を受けた部長の先生がいらっしゃる関連病院もしっかりとして、この教室を盛り上げているのだと思います。私は泌尿器科学教室の教育、研究、診療をさらに発展させるためにもいっそう努力したいと思います。

謹んで久住治男先生のご冥福をお祈りいたします。

追悼赤祖父一知先生

編集委員　山本　博

金沢大学医学部十全同窓会理事・会報編集委員・名簿編集委員、赤祖父一知先生が、去る9月27日逝去されました。赤祖父先生は、昭和34年本学医学部をご卒業後、直ちに本学産科婦人科学教室に入局、同41年助手、44年講師、46年ドイツミュンヘン大学留学を経て、47年助教授、平成７年社会保険鳴和総合病院院長、同12－22年社会保険病院名誉院長を歴任されました。大学時代は、副腎性アンドロゲンを中心に女性の加齢と内分泌変動に関して研究され、その成果は171編の原著論文・総説・著書に結実しました。また、幕末明治期を中心に北陸の医学史を研究され、107編の論文・資料等をまとめられました。平成22―25年には、会長として北陸医史学会を領導されました。

同窓会活動に関して特筆すべきことは、『金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み』(平成5年発行：山口成良編集委員長)編集委員につづき、『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』(平成24年発行：山本博編纂委員長；以下、『記念誌』)編纂委員会特別委員としてはたされた多大のご貢献です。赤祖父先生のお助けがなかったら、『記念誌』は発行が遅れ、輝きも大きく減じたことでしょう。故寺畑喜朔同特別委員と平成13年頃から書き溜められた『金沢大学医学部百五十年史への覚え書』計34編は『記念誌』編纂のための第一級の資料となりましたし、通史の部では8つの枢要な項を執筆いただきました。約3年の歳月を費やして行われた金沢藩彦三種痘所所在地の推定は、赤祖父先生渾身のお仕事で、『記念誌』の白眉となりました。

いささか私事になり恐縮ですが、産科婦人科学、医史学の双方で私は赤祖父先生の薫陶をうける僥倖を得ました。昭和50−53年の間、私は金沢大学産科婦人科学教室に在籍し、日本産科婦人科学会北日本連合地方部会における赤祖父助教授の特別講演「女性血中副腎性アンドロゲンの動態に関する研究」の英文冊子“STUDIES ON ADRENAL ANDROGENS IN WOMEN”作成などを手伝わせていただきました。当時赤祖父先生は、新進気鋭の助教授で、壇上や執刀中のお姿は颯爽としており、趣味の野球でも教室を代表するスラッガーでした。

下図は、富山市にある旧千歳御殿の正門です。明治初期に、富山藩から赤祖父先生の高祖父―赤祖父義正富山藩医の本家赤祖父牛松宗家に売却されていたため、戦災をまぬがれ、赤祖父家から富山市への寄贈を経て、平成20年、千歳御門として富山城址に移築完成されました。「赤門」として知られる加賀藩上屋敷(現東京大学本郷キャンパス)御守殿門と同じ三間薬医門様式で嘉永2年に建造されたと推定されています。御守殿門と千歳御門は設計、装飾などに共通性を有し、

赤祖父一知先生遺影

前者は丹塗り、後者は赤瓦を特徴としています。図の写真は、赤祖父先生ご自身によって撮影されたものです。選ばれた天候と時刻が絶妙で、城址内部への配慮も感じられます。私も数十枚ほど撮りましたが、どれも赤祖父先生のこの1枚に及びませんでした。「修業が足らんチャ」という先生の声が聞こえる気がします。

赤祖父一知先生の御霊に感謝の真を捧げ、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

図．北陸の赤門―富山城千歳御門(赤祖父一知先生撮影)

病院紹介

公立穴水総合病院

当院の歩み

当院は昭和31年に「町営穴水診療所」として開設し病床数４床、診療科目は内科と産婦人科だけの職員が8人という小さな診療所としてスタートいたしました。

昭和40年には「穴水町国民健康保険穴水中央病院」に名を改め、結核など感染病床を含む131床の地域に密着した病院として進んでまいりました。昭和56年には鉄筋5階建て177床の病院を新設し名称を「公立穴水総合病院」と改め現在に至っております。

当院の課題

当時は奥能登で一番新しい病院として金沢大学および金沢医科大学から医師を派遣いただき10診療科の常勤医師をもつ総合病院として順調に発展し、優良病院として全国自治体病院協議の表彰を受けるほど経営状況も良好でした。

しかし、平成16年度の新医師臨床研修制度の創設に伴い医師の確保が次第に困難な状況となり平成17年には不良債務が発生することとなり経営状況も厳しい状況が続き、町長が病院事業の再建を一番の課題に挙げるほど厳しい状況でありました。著しい過疎化による人口の減少に伴い平成20年度に病床を100床にまで削減し、健全な経営の維持や経営効率の改善を図ってまいりました。

平成22年当時、私は富山市内の病院に勤務しておりましたが、北海道の夕張病院の次は能登の穴水総合病院という噂が富山まで届いていたほどでした。

重く暗い雰囲気が漂う中、平成23年4月に病院長として赴任いたしました。以来、「患者第一」、「職員が幸せになる職場」を掲げ、365日にほぼ毎日病院に寝泊まりし、祝日も年末年始も病院で仕事をしておりました。この間、医師不足のなか他の先生方にも大変なご苦労をおかけいたしましたが、今にして思えば楽しい日々だったと感じます。

平成29年度には金沢大学医学類特別枠の医師を派遣いただき、私もようやく自宅での寝泊まりができるようになりました。まさに「救いの神」でありました。本当に感謝をしているところであります。

今後の展望

今では大学をはじめ関係機関の協力や職員の努力により何とか不良債務を解消し令和2年度決算では利益剰余金が14億8千万円までに回復いたしました。

しかし、未だ奥能登の過疎化には歯止めがかからず、ますます高齢化が進行し当町においても高齢化率が50％を超え人口減少が著しい状況にあります。

加えて新型コロナウイルス感染症の拡大によりこれまでに経験したことのない厳しい状況下に置かれております。

そのような状況下ではありますが、感染防止の徹底を第一に優先し、昨年の4月より正面玄関にトリアージ担当職員と看護師を配置し、医師についても当番制で貼り付けを行い現在も継続しております。

また、病棟の一部ゾーニング化のための自動ドアによる隔離空間の整備や陰圧機、空気清浄機、スタッフ専用シャワー室を整備するなど専用病床の改修を行い、これまで課題であった有熱外来の改修にも取り組み、患者はもとより医療にあたるスタッフの安全安心を最優先とし整備を行ってまいりました。

現在は新型コロナ感染症の拡大も減少傾向にありますが、これまで以上に感染防止に努め小さな病院ではありますが、職員一同が力を合わせ、コロナ禍を乗り越え、地域住民の命を守るという使命を果たしていきたいと考えております。

今後も本同窓会にはこれまで以上のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（院長　島中　公志：記）

概要

公立穴水総合病院

所在地	石川県鳳珠郡穴水町字川島タの8番地
病院長	島中　公志
病床数	100床
診療科	11

沿革

昭和31年２月	「町営穴水診療所」として開設
昭和40年４月	穴水町国民健康保険穴水中央病院に名称変更
昭和56年10月	公立穴水総合病院に名称変更

社会福祉法人恩賜財団済生会
富山県済生会高岡病院

沿革

「恩賜財団済生会」は、明治44年に明治天皇の命により、「生活苦で医療を受けることができずに困っている人たちを施薬救療（無償で治療すること）によって救おう」との趣旨で桂太郎総理大臣の下で発足し、初代の医務主管には北里柴三郎が任ぜられています。現在の総裁は、第6代目で秋篠宮皇嗣殿下が就いておられます。

済生会富山支部は、昭和6年7月に発足し、昭和10年に富山市桜町に富山病院が開設されました。しかし、戦災により焼失し、昭和20年11月に高岡市末広町に移転しています。その後、富山病院は富山市に戻り、高岡市の病院は、昭和23年3月に済生会高岡病院として新たにスタートしました。当院は、その後、平成6年1月に現在の高岡市二塚に移転しています。現在の場所は、北陸新幹線新高岡駅の近くで、イオンモール高岡が隣接し、北陸自動車道高岡砺波スマートインターから車で10分と、今後の発展が期待される利便性のよい地域です。

概要

当院は、19診療科で常勤医師数45名、うち臨床研修医1学年4名ずつで計8名が在籍しております。許可病床251床（稼働248床）の病院で、内訳は、HCU7床を含めて急性期病棟が計151床（DPC標準病院群）、地域包括ケア病棟52床、回復期リハビリテーション病棟45床です。急性期病棟は7対1看護で、毎週木曜日と第2土曜日および第3火曜日は高岡市に加えて氷見市と射水市も含む高岡医療圏の二次輪番救急を担当しています。日本病院機能評価機構による認定、地域医療支援病院、富山県がん診療地域連携拠点病院の指定、WHO・ユニセフによる「赤ちゃんにやさしい病院」の認定も受けています。また、訪問看護ステーションと訪問リハビリテーション事業所を有し、在宅療養支援にも力を入れています。さらに、令和元年5月には地域型認定保育園を開設し、病児保育や一時預かり保育も実施しており、地域における働く親御さんの子育て支援にも努めております。一方、現在、コロナ禍で一時的に規模は縮小しておりますが、当院・イオンモール・高岡市との3者協働による未来に向けた持続可能なまちづくり事業も実施してきております。

医師は、金沢大学と富山大学の医局出身者で、金沢大学関連の診療科は、消化器内科、整形外科、産婦人科、泌尿器科です。大学医局の垣根を超えて、各診療科の連携は良好です。臨床研修医も金沢大学卒4名と富山大学卒4名と半々となります。

展望

今後とも、済生会の理念を踏まえ、無料低額診療の実施やソーシャルインクルージョンの推進、さらには持続可能なまちづくりへの貢献に努めてまいります。また、当院は、出産から終末期医療まで、急性期から回復期医療までのベストミックスを目指しております。その中で、特色ある急性期医療として、経皮的冠動脈ステント留置術や不整脈に対する心筋焼灼術（アブレーション）、脊椎や腹部の鏡視下手術、早期の消化管がんに対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）、人工関節全置換術など高度専門的医療を発展させていきたいと考えております。皆さまのご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（院長　野田　八嗣：記）

概要

社会福祉法人恩賜財団済生会
富山県済生会高岡病院

所在地	富山県高岡市二塚387－1
病院長	野田　八嗣（平成29年4月より）
病床数	許可病床251床（稼働病床248床） 急性期病床151床（HCU7床）、 地域包括病棟52床、 回復期リハビリテーション病棟45床
診療科数	19

沿革

昭和23年3月	高岡市末広町に済生会高岡病院として開設
平成6年1月	高岡市二塚に新築移転
平成26年10月	地域包括ケア病棟開設
平成28年5月	回復期リハビリテーション病棟開設
平成30年4月	訪問看護ステーション開設
平成31年4月	訪問リハビリテーション事業所開設
令和元年5月	福祉・保育総合センター開設　高岡なでしこ保育園開設

教室だより

皮膚科学

診療

当教室は、北陸地方における皮膚科診療の中心を担っており、北陸三県の関連病院を中心に、数多くの患者さんをご紹介いただいております。特に全身性強皮症や皮膚筋炎などの膠原病や、悪性黒色腫などの皮膚悪性腫瘍、アトピー性皮膚炎や乾癬の診療に力を入れております。また、日本アレルギー学会のアレルギー専門医教育研修施設でもあるため、近年社会的ニーズが高まっているアレルギー疾患の専門的医療においても、地域の基幹病院として貢献していければと考えております。また、2014年より形成外科が新設されました。現在常勤5名体制で診療にあたっております。皮膚科単独では難しい再建や、整容面で専門的な診療が必要な患者さんについては適宜連携を取り、協力しています。入院患者さんの治療に関しては、毎週教授を中心としたカンファレンスを行っており、その方針を決定します。外来診療では上記疾患の専門外来を設けており、それぞれの疾患にきめ細やかに対応しております。

今後も、上記疾患以外にも幅広く柔軟に対応し、子供から大人まで皆さまが皮膚疾患で悩まずに生活ができるよう、教室員一同力を合わせて取り組んでまいります。

教育

医学類学生教育では、皮膚科・形成外科の講義・臨床実習などを通じて、3年生から6年生まで幅広く担当します。皮膚は成人で約1.6m^{2}の面積を持つ最大の臓器であり、細菌やウイルスなどへの感染、紫外線や物理的な刺激から体を守るとともに、体温調節機能や感覚器としても重要な役割を果たしています。また皮膚は内臓の鏡とも言われ、内臓におこった異常が皮膚の症状として出現することがあり、その症状から内臓の病気が見つかることもあり、皮膚科学の醍醐味でもあります。医学類生には皮膚の正常機能から疾病まで幅広く勉強していただきたいと思っています。

研究

当教室では、免疫関連の研究が主であり、特に全身性強皮症や皮膚筋炎などの膠原病の病態解明を目的として、B細胞機能、その中でも自己抗体と産生サイトカインに着目して研究を行っています。膠原病の自己抗体の解析では、免疫沈降法による疾患特異自己抗体の検出を20年ほど前より行っており、その成果として近年保険収載された抗TIF1-γ抗体の新規同定、抗体によるサブセット分類の実現などを介して皮膚筋炎の診断技術の向上に寄与してきました。この免疫沈降法は全国でも限られた施設でのみ可能であるため、全国のさまざまな施設より解析の依頼があります。また、乾癬やアトピー性皮膚炎のモデルマウスを用いた研究にも力を入れております。研究で得られた成果を、学会発表や論文発表で国内はもちろんのこと、世界に広く発信していくことも当教室の務めでありますので、今後も数多くの研究を行ってまいります。

おわりに

当教室は昨年度、第9代教授松下貴史が就任し、新体制となりました。若い医師も多く、活気あふれる教室となっております。今後さらに診療、教育、研究の3つの柱に惜しみなくエネルギーを注ぎ、北陸のみならず、全国に誇れる皮膚科学教室を目指して邁進してまいります。

十全同窓会の諸先輩方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻を賜わりますよう、よろしくお願い申し上げます。

（松下　貴史：記）

スタッフ

教　授　　松下　貴史
准教授　　濱口　儒人
講　師　　小室　明人、前田進太郎（病棟医長）
助　教　　伊川　友香（外来医長）、大石　京介（医局長）、
　　加納　美優、井川　祐一
特任助教　沼田　夏希
医員16名、大学院生9名、事務補佐員2名、
技術補佐員4名

研究分野の沿革

当教室は、1913年に土肥章司教授により皮膚病花柳病学講座として開設され、1930年には皮膚科泌尿器科学講座に改称、1955年に皮膚科学と泌尿器科学が分離し、皮膚科学教室となりました。2014年には金沢医科大学形成外科から形成外科専門医2名が当教室に移籍し、2017年からは小室明人講師の元で形成外科学教室を新設しました。2020年には皮膚科第9代教授松下貴史が就任し、現在に至っております。

分子細胞病理学

はじめに

病理学は組織形態観察を軸として全身諸臓器の疾患にアプローチする学問です。当教室では、病理診断の精度向上を目指す病理診断学的研究のみならず、ゲノム解析などの新技術を活用して疾患の成因や本態の解明を目指す基礎的な研究を行っています。これらの研究を遂行するにあたっては、病理医としての視点、知識、勘が必須となります。ということで、スタートラインとして「質の高い病理医の育成」を目標に据えています。同時に、臨床各科の先生方と連携して、臨床病理学的見地からインパクトのある仕事を生み出していく必要があると考えています。これらの目標を達成するにあたっては、学類学生、研修医といった早い段階から病理組織に触れてもらう、すなわちミクロの世界に親しんでもらう（顕微鏡フォビアを克服してもらう）ことが重要ですので、学生教育やMRTプログラム、卒後研修には特に力を入れています。ただ単純に「勧誘して病理医になってもらう」のではなく、学類全体としての病理リテラシーの向上を図っていきたい。結果として「生業として病理医・病理学者を選択する者」が出現し、「病理の分かる臨床医」が増えれば、病理診断業務はより円滑になり、病理学研究の発展も期待できるはずです。

研究

病理の強みの一つは全身臓器を研究対象としうることです。当教室では前田が婦人科病理を専門とし、尾山が主に消化管を対象とした研究を行っていますが、スタッフや大学院生にはこれらの臓器にとらわれず、それぞれが探求したい臓器、疾患を深追いしてほしいと考えています。今年度から新体制で立ち上がったばかりの研究室ではありますが、今後、メンバーの拡充を図り、全身諸臓器をカバーする形で研究体制を敷いていく予定です。

研究テーマの設定に関しては、実症例の診断業務における気づきや疑問を大切にするように指導しています。病理診断業務のあり方は近年のゲノム科学の進歩の影響を受けて大きく変わってきています。古典的なH＆E染色標本の観察から得られる情報に加えて、ゲノム解析によって得られる遺伝子異常の情報が入ってくるようになったことで、病理医、病理学者には新たな気づき、疑問が生じてきています。これらをシーズとして行う研究が病理診断に役立つ成果や疾患の本態解明につながれば、診断業務と基礎研究の間は自ずとシームレス化していくものと思われます。

現段階では、婦人科腫瘍の背景遺伝子異常、正常上皮に存在する変異細胞集塊、間質性膀胱炎におけるBリンパ球のclonal expansion、胃がんのコピー数異常に関する研究が走っており、これらと並行して病理解剖検体を対象とした研究を行う準備を進めています。病理解剖検体には生前の検体からは得られない情報（全身のがんの不均一性など）が詰まっており、次世代シーケンスや質量分析といった新技術を活用することで、新たな価値を生み出すことができるのではないかと考えています。

診断

人体病理学（旧第二病理学講座）と協力して附属病院の病理解剖を担当しています。また、附属病院病理診断科・病理部と連携して、手術検体や生検検体の診断に関する討議を行っています。常勤病理医が不在の北陸圏の地域基幹病院の病理診断業務を行うことで、地域医療への貢献も行っています。今後、病理医の拡充に努め、さらに大学内外の診断業務に貢献していきたいと考えています。

教育

医学類２～３年生の「病理学Ⅰ」の講義と実習を担当し、「基礎研究室配属」を分担しています。病理総論の講義では「腫瘍」と「遺伝性疾患」を扱い、各論では「消化器」「女性生殖器」「骨軟部」「血液」「循環器」の疾患を取り上げています。実習標本は本年度から抜本的にリニューアルしました。各疾患の組織像の把握の前に、顕微鏡の扱い方、標本作成の過程などといった基礎的なところをきちんとおさえるように指導しています。修士課程の講義、博士課程「up to dateセミナー」では、より専門性の高い内容、最新の研究内容に言及しています。

「病理に興味がある」という学類学生がMRTプログラムに多数参画するようになり、病理解剖への参加、剖検検体や手術検体の病理診断の下書き、AI活用の余地の模索など、様々な形でコミットし、研究室を盛り上げてくれています。

おわりに

病理学の魅力を発信し続けることができる教室を目指して、メンバー一同努力をしていく所存です。十全同窓会の先生方におかれましては、今後とも温かいご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（前田　大地：記）

スタッフ

教　授　　前田　大地
助　教　　尾山　　武
大学院生１名、技術補佐員２名
MRT学生７名

研究分野の沿革

本教室は1926年に初代教授として中村八太郎先生が就任し、第一病理学講座として発足しました。中村教授の後、宮田栄教授、渡辺四郎教授、梶川欽一郎教授、中西功夫教授、大井章史教授へと受け継がれ、結合組織研究およびがん研究を発展させてきました。2021年に第7代教授として前田大地が就任し、現在に至っています。

支部だより

福井支部

本来は令和2年8月開催予定であった第71回十全同窓会福井県支部総会は、新型コロナ感染症拡大に伴い令和３年8月27日金曜日に順延されました。例年ですと総会に引き続いて講演会と懇親会も実施されていましたが、今年は総会のみとなったため、福井県医師会館にて開催されました。高志地区の福井大学が幹事で、最年長の私横山（泌尿器科学）が司会をさせていただきました。懇親会には楽しいパーフォーマンスを考えていたのですが中止となり大変残念でした。8月下旬はコロナ感染者が福井県でも毎日40名を超えていて県独自の緊急事態宣言が発令中であり、酒類の提供は午後7時まで、帰省や旅行は控える、会話時は真正面を避ける、筋トレやヨガは自宅で動画を活用、ジョギングは少人数で、など細かな点まで「新しい生活様式」の実践を求められていました。私の勤務先の福井大学病院でもコロナ感染者用のベッドは最大33床まで拡大できるのですが、この時点で６～７割は稼働していまして、さらなる感染拡大に危惧する状況でした。

今回は福井県医師会館への参加が21名、Webでの参加が14名となりました。福井県支部総会には毎年30名から50名近くの先生が現地参加され盛大に開催されていますが、今年は現地参加も少なく寂しい総会となりました。学会や研究会がことごとく中止となる中、Webを活用した会議や催しが増えていますが、会員相互の会話も制限されコミュニケーションをとれないもどかしさを感じました。総会は私の開会の辞に引き続いてこの2年間にご逝去されました７名の先生方に黙祷を捧げました。その後、福井県支部長の久保田紀彦先生のご挨拶、そして表祝の後、久保田先生司会の元、議事に入りました。

報告事項では令和2年度会務報告、支部会員数と会費納入状況が報告され、協議事項では令和3年度会務計画案、令和2年度の会計報告がなされ承認されました。編集委員長平野治和先生から「十全同窓会福井県支部だより」についての提案がありました。菅田敏明先生から平野治和先生へ編集委員長が交代となりましたが、近年投稿数が少なく存続の危機にあるとのことで、投稿内容や投稿数の増加について意見が交わされました。各会員と各ブロックからの積極的な投稿をお願いされていました。

最後に来年当番幹事をお務めいただく副支部長田中延善先生のお言葉に引き続き、もう一人の高志地区幹事の中本安成先生に閉会の辞を頂戴いたしました。会場への参加者の記念撮影をして総会を終了としました。令和4年は例年通り、マスク着用せずにこの同窓会総会が盛大に開催できるように願うばかりです。

なお、令和3年度は６名の方が傘寿を迎えられお祝いをお贈りしました。また、叙勲祝いを２名の方にお贈りしました。

（横山　　修：記）

同窓生の消息

第49回衆議院議院選挙当選のご挨拶

衆議院議員
松本　尚
（昭和62年卒業）

この度、第49回衆議院議院選挙におきまして千葉県第13選挙区での当選を果たすことができました。ご支援をいただきました十全同窓会の皆さまには改めまして厚く御礼を申し上げます。

私は、昭和62年に金沢大学を卒業し、当時、宮崎逸夫教授が主宰する第二外科学教室に入局致しました。大学附属病院、黒部市民病院、富山県立中央病院、国立金沢病院などに勤務しながら消化器外科を中心とした外科治療の研鑽を積みました。平成7年に日本医科大学で救急医学の研修を行ったことを契機に救急・外傷外科領域で腕を奮いたいと思い、平成12年より同大学救急医学教室に入局、その後20年間で同大学千葉北総病院救命救急センターをわが国トップの重症外傷治療施設にし、ドクターヘリ事業では全国普及の先頭に立ちました。災害医療ではDMAT（災害医療派遣チーム）の創設段階から係わり、東日本大震災をはじめとして多くの被災地に出動しました。

このような経験から、新型コロナウイルス感染症に対して千葉県災害医療コーディネーターとして県庁で陣頭指揮をとっていたところ、病床や医療従事者を確保できない事態を目の当たりにしました。非常時においてわが国の医療がこのように脆い構造のままではいけない、どのような事態でも確実に医療を提供できるための健康危機管理体制を構築したいと思い、この度の国政挑戦を決意した次第です。

11月1日より国会議員としての生活が始まりました。自分の政策を実現するための長い道のりになりそうですが、信念を曲げることなく、30年以上の医師としての経験を国政にぶつけていきたいと考えています。十全同窓会の皆様方には、何卒、引き続きのご声援、ご支援をお願いしたいと思います。

Student Doctor 認定証授与式

令和３年11月４日、臨床系統試験や共用試験を終えた私たちは、Student Doctor認定証授与式を終えることができました。杉山学類長からStudent Doctor認定証を受け取るに伴い、これからStudentDoctorとして臨床の現場に立つことへの実感や緊張を身に沁みて感じ、身が引き締まる思いでした。

4年前、細胞内構造物の名称を覚えるところから私たちの医学の学習は始まりました。学ぶ分野が広がるうちに、最初は分野ごとに進めていた学習が繋がっていくことを実感し、特に臨床に直結する系統講義では、医学という分野の幅広さと奥深さを実感しました。

これからは、実際に臨床実習で現場に立ち、学ぶことになります。先日、杉山学類長から「患者さんがさまざまな情報を持ってきてくれる。たくさんのことを教えてくれて、学ばせてくれる。患者さんが先生であると思って学習を進めなさい」というお言葉をいただきました。臨床現場では教科書通りの症例は無く、正解となる答えも用意されていないため、患者さんから得られる情報をもとに自ら推察し、答えを導き出す力を培うことが必要となります。そのプロセスの中で、生涯を通して学び続ける姿勢を身につけ、各々が理想とする医師像に近づいていければと考えています。

新型コロナウイルス感染症の流行により医学生が病院内で実習をすることができない時期もありました。このような状況下で、実習の機会を作ろうと動いてくださる方々がいること、何もわからない私たちに自らの業務をこなす中で一生懸命指導してくださる医師、コメディカルの方々がいること、そして自身が大変な状況にある中でも協力的にたくさんの学びを与えてくださる患者さんがいることに感謝し、貴重なこの実習を実りあるものにしていきたいです。また、これまで私たちの成長を願い支え続けてくれた両親や祖父母、各々の目標に向かい共に勉学に励んできた友人、たくさんの学びを与えてくださった先生方には感謝してもしきれません。実習を終えた2年後に立派な医師としての姿を見せることで恩返ししたいです。

最後に、昨今のコロナウイルス禍の折、細心の注意を払いながらStudent Doctor認定証授与式を催してくださった先生方や学務課の方々、関係者の皆さまに４年生を代表して心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

（医学類4年　清水　咲来：記）

Webキャンパスビジット2021（オープンキャンパス）

日時／令和3年8月3日～16日
Web開催

令和3年8月3日～16日に、金沢大学のWebキャンパスビジット（オープンキャンパス）が行われました。Web特設サイトが開設され、学類紹介、模擬講義やヴァーチャル研究室ツアー、オンライン進学相談などが実施されました。

医学類では、杉山和久医学類長のご挨拶、「在学生が案内をするキャンパスツアー」、「学類説明」、谷口巧教授による「術中輸血と輸血療法」の講義動画などをオンデマンド配信しました。また、岡島正樹教授による「患者の人生を救う！社会から必要とされる救急医とは」の夢ナビ講義動画を新たに作成し、期間限定でオンデマンド配信しました。8月9日、10日、11日には、菊知充教授による「社会性の発達を理解する」、倉知慎教授による「体をまもる免疫の働き～感染症と癌の克服を目指して～」の模擬講義をリアルタイム配信しました。3日間で計206名が受講し、非常に活発な質疑応答が行われました。金沢大学医学類の魅力や社会的使命について、多くの方に知ってもらう良い機会になりました。

キャンパスビジットは、優秀で意欲の高い学生を全国から集めるためにも、大変重要なイベントと考えています。オンライン開催により、遠隔地の高校生も気軽に参加できたかと思います。10月30日には対面型のキャンパスビジットを十全講堂において小規模で行い、学類説明や在学生との懇談会を行いました。今後もオンライン型と対面型を上手く組み合わせ、優秀な高校生に多く受験してもらえるよう、努力したいと思います。

（三枝　理博：記）

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その3）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

緩和医療の臨床では、人生の最終段階を迎える患者さんとその家族への対応が求められ、医療者自身も生と死について考え、死にゆく人に寄り添う態度や姿勢が必要になる。筆者が担当する医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は苦境の中をいかに生きることができるのかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」との課題を与え、レポートにまとめさせてきた。

令和3年9月に令和2年度5年生のレポートと実習時の写真を掲載した報告集（金沢大学医学生と「生と死」を考える：第10号）を発刊した（図1）。本稿では報告集に掲載した筆者の巻頭言の一部を紹介する。

図1

巻頭言より

川崎春奈さんは祖父の最期の時間を、笠井佑樹君は余命宣告に同席した実習体験を紹介してくれました。２人のレポートからも、医療者にとっても一般の方にとっても、死まで生きることを共に話し合うことは容易でないことが分かります。堺堀裕子さんは「ER緊急救急室」を取り上げ、医師であっても自身の死を受け止めることは難しく、医療者以外の方ではさらに困難なことだと指摘し、患者の苦しみや思いについて、想像力をもって診療していくことが求められると記しています。

人は病気以外でもさまざまな苦境の中で死を考えてしまう弱い存在です。岩崎秀幸君は、若きウエルテルの悩み（ゲーテ）を取り上げ、自殺に関して考察してくれました。大橋純頼君と山崎智洋君は、自身が死を考えた体験と、そこから復活した経緯と思いを示してくれました。片山りか子さんは、人生における苦境とは、生きる怖さが生きる楽しさを上回った状態であると指摘しました。

生と死はさまざまに捉えることができます。伊藤佑輔君は、ゴーギャンの絵画「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」を取り上げ、死を身近に感じない限り、生きる意味は分からないだろうと述べています。梶原佑一君は、死は人生における最期の生き方であり、自身で意味を与えることが重要であると述べています。矢加部碧さんは「メメント・モリ」を取り上げ、いつか訪れる死を前提として生きることは苦しいことだが、どう生きていくかは考え方次第で全く異なったものになると指摘しました。

実際に苦境を生きた人を知ることで、励まされ、自身の生き方の参考になることがあります。阪井祐介君と伊藤夢絃君は正岡子規とホーキング博士を、戎井孝志君と金原俊史君は心臓移植を待つ方と緩和ケア医の大橋洋平先生を紹介してくれました。小島明穂さんと杉本惇子さんが取り上げたフランクルの「夜と霧」「それでも人生にイエスと言う」は、強制収容所での体験と医師の視点から苦境の中を生きる考え方を述べている世界的な名著です。

医療者が基盤とする考え方として、アンブロワズ・パレの「治すこと時々、和らげることしばしば、慰めることいつも」を何度も取り上げました。慰めることにはさまざまな表現形があると思われ、寄り添い、笑いとユーモア、愛おしみ、赦し、感謝、後悔と和解、幅広い包容力などです。岩上泰士君は登山家の田部井淳子さんを支援した医師の寄り添いを、大西勇輔君はパッチ・アダムスの笑いとユーモアを、松本星貴君は神谷美恵子の愛おしみを、中村慶乃さんと小式澤祥さんは、愛し愛されること赦し赦されることを、自らの視点で紹介してくれました。青山知裕君は，銀河鉄道の夜（宮沢賢治著）を取り上げ、自身に捉われない「ほんとうのさいわい」を求めたカンパネルラに対して、賢治が美しく輝く広大な宇宙を与えたと大きな包容力がある考えを示しました。

皆さんも医師になってから気がつくでしょうが、新たな医学の知見を学ぶ機会は多くありますが、生と死に関して学び考える機会はほとんどありません。金大病院緩和ケアセンターでは、医療者にこのような機会を提供することを心掛け、その際には皆さんのレポートを紹介させてもらっています。医学には科学的な知性と厳密さが必要ですが、医療では哲学的な知性と優しさも必要です。卒業後も研鑽を重ね、人間性ゆたかな優れた医療人に成長してほしいと願います。

なお、優れたレポートのいくつかを医学雑誌ペインクリニックに投稿して、全国に紹介させてもらった[1-3]。

1）山田圭輔，小川和浩，吉田健太郎，真智耕介，奈須仁克：金沢大学医学生との実習で死を通して生を考える．ペインクリニック42：1039-1041，2021
2）山田圭輔，川原寛之，矢加部碧，西村駿助，石田羽海，伊藤佑輔：金沢大学医学生との実習からメメント・モリを考える．ペインクリニック42：1139-1141，2021
3）山田圭輔，元木優里，岩上泰士，松本星貴，青山知裕：金沢大学医学生との実習から寄り添いを考える．ペインクリニック42：1338-1341，2021

金沢大学医学生と「生と死」を考える（アーカイブス）：麻酔科蘇生科での緩和医療実習10周年記念

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

金沢大学医学生と「生と死」を考える実習は2009年度から開始し、2011年度の5年生からは全員のレポートを報告集（金沢大学医学生と「生と死」を考える）として編集してきた。2021年は報告集第1号発刊から10周年にあたり、金大病院内で勤務している当時の5年生を集めて記念撮影を行った（写真1、2）。本稿では第1号の中で特に印象に残っている田辺命君、横田航志君のレポートを紹介する。

1）ホスピスが美術館になる日（横川善正、ミネルヴァ書房）

金沢美術工芸大学の横川教授の著書で、ターミナル・アートという考え方を打ち出している。生を終えて死を迎えるターミナル・ケアの場であるホスピスに、アートを導入しようというものである。ターミナルは終末（The End）というイメージが強いけれども、著者はそれだけではなく、駅のターミナルと同様で終着だけでなく始発も存在するAn Endの場なのだと述べている。

ホスピスはアートを生み出す始まりの場でもあると考えた著者は、アートとはいわゆる美術作品だけでなく、限りある人生を受容することで創造される幅広い作品を仕上げることであり、その作品を理解して共鳴できる介助役としてアーティストが必要なのだと述べている。私は、ホスピスがThe EndではなくAn Endの場であるという思想に驚き感銘を受けた。医師になった時には、死を迎える人に上記のような手助けができるかも考えて活動していきたい。

2）Tomorrow Never Knows

生と死について考え始めると、自分が医学部受験を決心した時の気持ちや考えが思い出された。当時の私は、人間の生命はロウソクの炎のように簡単に吹き消されてしまうものという考えがあった。これは大阪教育大学附属池田小学校殺傷事件、JR福知山線脱線事故や阪神淡路大震災で多くの命が一瞬にして失われてしまうという、兵庫県で生まれ育った自身の経験によるところが大きい。事件、事故や災害はいつ誰にでも起こり得るもので、私たちの生命というのは非常に不安定なものだと考えていた。そしてこの不安定性に立ち向かっていくのが医療であり、自分も医療に携わりたいと思うようになった。

しかし最近に上記とは反対で、人間の生命はそんな弱いものではなく、もっと力強いものだと感じる機会があった。3カ月前に神戸マラソンに出場して神戸の街を駆け抜けていると、復興を遂げた神戸の街の輝きに驚かされた。久しぶりに帰郷して走りながら復興を見つめなおすと、人間と社会の力強さがとてつもなく大きなものであると肌で感じた。神戸マラソンには東日本大震災の被災者が多く招待されており、彼らがいつか同じように感じられる日がくることを願った。ロウソクの炎が吹き消されたように見えても、実はその芯はまだ熱く、再び大きな炎へと燃え上がるものだと信じたい。

写真1：医学生実習時の記念写真
（後列左）田野翔，藤田直久，吉川茜，本藤貴恵
（前列左）筆者，沖村幸太朗，横田航志

写真2：実習10周年の記念写真
（後列左）島田貴史：泌尿器科，石塚啓祐：麻酔科蘇生科，沖村幸太朗：放射線科，廣正智：核医学診療科，田辺命：血液内科，伊良部仁：小児科，筆者
（前列左）野口和寛：小児科，水牧（本藤）貴恵：皮膚科，吉田（小泉）瑛子：小児科，作村直人：小児科

学生コーナー

病院実習をよりよいものにするために

医学類４年
大畑　典星

この原稿を書いているのは11月の第2週、ちょうど初めての病院実習がスタートした頃になります。入学してからの座学および試験の期間が一旦終了し、新しい環境のもとで医学の勉強に励む、いわば医学生にとっての節目といえる時期です。皆さん経験がある通り、今までと違った環境で何かを始めること（入学、就職など…）は少なからず緊張や不安がつきまとうもので、僕もまた病院実習に参加するにあたって緊張を感じています。しかしながら、これは同時に新しい知識や経験を得る絶好のチャンスでもあります。この節目を利用してフレッシュな気持ちで実習への参加に意気込み、自分の能力をアップデートしていくことができるでしょう。

というわけで、今回は僕が病院実習を行うにあたって意識していること、またはやっていきたいことを紹介していきたいと思います。

1つめは「元気よくあいさつする」ことです。僕たちは医療スタッフの一員として実習に参加するわけですが、前提として僕たちはその中の「お荷物」的存在です。医療行為はろくにできないし、何人もで病院内をうろうろ見学していると、ぶっちゃけ邪魔です。そんな僕たち実習生が唯一、医療スタッフの中で貢献できることは「元気の良い挨拶をすること」になります。例えば朝のまだ体が覚めきっていない雰囲気の中で「おはようございます！」という元気な挨拶が1つあれば、その場の雰囲気が少し明るくシャキっとなるはずです。実際のところ、朝の慌ただしく仕事していらっしゃる医師や看護師の方に元気よく挨拶するのはちょっと勇気がいります（本当に忙しい時は挨拶を返してもらえない時もあるので…）。でもそこは気にせず、明るい挨拶こそが自分の最も優先すべき仕事だと言い聞かせるのが良いと思います。とりあえず僕は「おはようございます！」と「ありがとうございます！」をその日一番のテンションで言うよう心掛けます。

2つめは「よく寝る」ことです。病院実習を長期にわたって続けていくために必要なことは、しっかりと健康管理をして風邪をひかないことです。健康管理にはバランスの良い食事や適度な運動など色々ありますが、中でも重要なのは充分な睡眠をとること。たっぷりと寝て健康な体を維持することで、タフに実習を続けていくことができます。脳をよく働かせることやうつ防止の観点からも、睡眠はカギとなってくるでしょう。

3つめは「時間を守る」です。これはもうやったほうがいいとかではなく、マストでやらなければいけない事ですね。時間が守れないというのは単に時間に疎いという話ではなく「時間を守れない人間＝約束を守れない人間」とあっという間に信用を無くします。ただでさえ実習生は役に立たないのに、時間まで守らないとなると本当に終わりだと思っています。常に余裕を持った行動をしていきたいものです。

病院実習で意識していることの4つめは「現場を感じる」ことです。初めて本格的に病院の現場に出る僕たちにとって、目の前はあらゆるものが新鮮であると同時に分からない事だらけです。だから、例えば医師はじめ医療スタッフの方々がどのように業務を行っているのか、仕事はどのように回っているのかなど、おおまかな流れを感じ取ることをまずやるのが良いのではと考えています。また、僕たちは医療者として未熟ではありますが、その裏を返すと、患者さんの立場により近いと言い換えることもできるかもしれません。フレッシュで経験に浅いからこそ、医療スタッフの方々が現場に慣れて気づかなくなってしまった感覚を鋭敏に感じ取ることができます。それはある種の患者目線に近いものなのではないでしょうか。

5つめは「どんどん質問し、どんどん動く」ことです。実習生はできない事も多いですが、実習生だからこそできる事もあります。知らないことばかり、何もできない前提なので、実習生は何でも質問していいし失敗も許容される身です（こんなこと言うと怒られそうですが…）。これを活かさない手はなくて、どんなに初歩的な疑問だとしても気にせず質問していくのが良いし、失敗を恐れずどんどん挑戦していくことができるはずです。一番良くないのは「分かったふりをする」ことや「間違えたら嫌だと思って行動しない」ことです。1ミリも役に立たないプライドは捨てて、学べるだけ学びまくる姿勢が重要だと思っています。僕は図々しいくらいに質問しまくるつもりです。

今回はあえて「医療の知識やスキルを修得すること」はリストアップしませんでした。もちろん、医療の知識や技能を深めることは病院実習における最も重要な目的のひとつです。しかし僕の本音としては「それは第一優先じゃなくていい」です。僕たちがまずすべきことは「当たり前のことを、ひとつずつマメに実行していく」こと。今回取り上げた5つは、どれも当たり前のことばかりです。でも、その当たり前のことをすべて高い水準で行動に移せている人はそう多くないように感じます。当たり前のことを淡々と実行することができれば、患者さんや医療スタッフから信頼されます。僕たち実習生は教えていただく立場なのですから、実習の第一歩として「信頼してもらうこと」から始まるのです。

最後に、病院実習に1週間ほど参加した現段階で僕が強く感じたことは、医療スタッフの方々の医療者としてのレベルの高さです。カンファレンスでは各先生方が自身の知識や経験を駆使してレベルの高い話し合いをされているし、皆さん患者さんのことを常に考えながら真剣に、誠実に仕事に取り組んでいらっしゃって、今の僕の現状との間に大きなギャップがあることを感じずにはいられませんでした。あまりにも僕が未熟すぎるので努力しなければと奮起できましたし、そういった環境の中で実習が行えることに非常に嬉しさを覚えています。階段を一段ずつ上がるように、できることをひとつずつ増やしていこうと精進していきます。

第15回金沢大学ホームカミングデイ開催

令和3年10月30日（土）、本学角間キャンパスにおいて、第15回金沢大学ホームカミングデイを開催しました。新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、十分な感染症対策を施した上での開催となり、歓迎式典には132名、懇親交流会には94名の卒業生及びそのご家族等にご出席いただき、盛況な1日になりました。

歓迎式典では、最初に、本学合唱団が校歌を斉唱しました。続いて、山崎光悦学長の歓迎挨拶、山出保金沢大学学友会会長の祝辞の後、和田隆志理事・副学長から金沢大学の近況が報告されました。最後には、現役学生の現状について、学生の留学体験報告（2名）・課外活動体験報告（硬式テニス部・1名）を実施し、出席者からは好評をいただきました。

特別講演では、「ごちゃまぜ」と題し、社会福祉法人佛子園理事長雄谷良成氏（昭和60年 教育学部卒業）に、ご講演いただきました。

歓迎式典終了後には、金沢大学学友会第11回役員総会が開催され、安宅建樹新会長が選出されました。また、山崎光悦学長より山出保会長へ、長年にわたるご貢献に対し、感謝状及び記念品目録が贈呈されました。

夕刻からの懇親交流会は、安宅建樹学友会新会長の乾杯の発声で始まりました。会場では、本学卒業生の木管アンサンブル〈ナチュール・クインテット〉により、開始前と乾杯後に演奏をしていただき懇親交流会はその素晴らしい調べに大いに盛り上がりました。

また、午前中にキャンパス見学会（4コース：33名）を実施しました。

次回、第16回金沢大学ホームカミングデイは、令和4年10月29日（土）に開催が決まりましたので、校歌の調べを聞きに、懐かしい母校にぜひお越しください。

（学友支援室長　米林　利晃：記）

歓迎式典で校歌を斉唱する合唱団と静聴する参加者

令和3年度十全同窓会会員名簿刊行

名簿は令和4年度、3年度会費納入の方にのみ発送いたします。

未納の方は至急お納めくださいますようよろしくお願い申し上げます。

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。

会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。

①自動引き落とし（手数料本会負担）

本年度より取り扱いを開始いたします。お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。

折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。

是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②払込用紙（手数料本会負担）

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。

③銀行ネット決済（ネットバンキング）

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。

（お振込の際は、**ご氏名の前に会員番号のご入力**をお願いいたします）

北陸銀行　小立野支店

普通預金　６０５１０４７　金沢大学医学部十全同窓会 会費口

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL：０７６－２６５－２１３２　FAX：０７６－２３４－４２０８　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

寄附制度のご案内（金沢大学医学教育研究支援寄附金）

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年９月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした≪金沢大学医学教育研究支援寄附金≫を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学　医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山　和久

【担当（お問い合わせ先）】

〒920-8640　金沢市宝町13-1　医学類Ｂ棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel：076-265-2115
E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

・　電子メール又は電話でのお申込み
　上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。
　現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

・　寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。（※所得税法、地方税法ともに２千円を超える寄附額から控除対象となります。）
・　寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

新型コロナワクチン・治療薬開発寄付口座のお知らせ

医薬保健研究域長
中村　裕之

十全同窓会会員の皆様へ

金沢大学医薬保健研究域は、この度の新型コロナウイルス感染症克服のために、伝統的な基礎および臨床研究力を活かし、ワクチン・治療薬の開発等に関わる研究を行っております。

この度、三井住友信託銀行との間において「新型コロナワクチン・治療薬開発寄付口座」を設置し、その寄付金を基に、現在、６つの研究グループが、その支援を受けて研究を鋭意、進めております。そこで、さらなる飛躍的な研究を行い、一層の研究力の向上を図るためにも、当ファンドは2020年８月をもって終了いたしましたが、同窓会の皆様には引き続きご支援を賜りたいと存じます。

同研究域は社会および人類に貢献するために一層の努力を惜しまない所存でございますので、何卒、ご支援の程、宜しくお願い申し上げます。

■寄附お問い合わせ先

金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
電話：076-265-2115（直通）
E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

■新型コロナウイルス感染症に関する研究紹介Webサイト
https://corona-study.w3.kanazawa-u.ac.jp/

金大病院コロナ基金へのご支援のお願い

附属病院長
蒲田　敏文

十全同窓会会員の皆様へ

当院は2020年4月より新型コロナ感染症の患者を受け入れ、50名を超える重症患者に対し人工呼吸器やECMO等による集中治療を行ってきました。写真にあるように40名を超えるスタッフからなるCOVSAT（Covid Special Assistant Team）の献身的な治療により、多くの重症患者は感染症を克服し、元気に歩いて自宅に戻ることができました。

今後も金沢大学病院は職員一丸となって、新型コロナ感染症患者の治療に頑張ってまいります。同窓会の皆様には、当院へのご支援のほど宜しくお願い致します。すでにご支援いただいた同窓会員様には、心より感謝申し上げます。

（COVSATによる腹臥位療法）

■お申込方法

金沢大学附属病院 新型コロナウイルス感染症対策基金
金沢大学附属病院ウェブサイト内の専用ページにて、お手続き願います。
https://web.hosp.kanazawa-u.ac.jp/oshirase/2020covid19_kifu.html

▼お申込みフォームへ

金大病院コロナ基金　検索

■お問い合わせ先

金沢大学 病院部 経営管理課 予算企画係　電話：076-265-2066（直通）　E-mail：hpyosan@adm.kanazawa-u.ac.jp

nihon medi+physics

for the happiness

明日の幸せを願い、「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)　https://www.nmp.co.jp/

日本メジフィジックス株式会社

2020年6月作成

ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る"舞台"という発想のホテルです。

地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一縁のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1(JR金沢駅兼六園口前)
Tel : 076-234-1111　Fax : 076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員（13名）

蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
篁　　俊成
和田　隆志
佐々木素子
谷口　　巧
山本　靖彦
中田　光俊
倉知　　慎
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（21名）

山口　成良
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
太田　哲生
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
高村　博之
常山　幸一
古川　健治
古市　賢吾
若山　友彦
中西　清香

以上34名で構成されています。
土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。

表紙の写真

中庭の四季

講義へ向かう学生たちが眺める、医学類教育等、E棟、F棟、G棟（それぞれは渡り廊下で繋がっている）に囲まれた中庭から。冬は雪に覆われ、初夏は新緑に包まれて、眺める人たちの目を癒します。

題字：山本　　健（十全同窓会会長）

発行：**金沢大学医学部十全同窓会**

会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町 13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和 4 年 1 月 20 日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

コロナ禍もやがて2年になります。これまでの日常を取り戻すべくさまざまな試みがされてきましたが、mRNAワクチンの開発スピードの早さは目を見張るものでした。最近、ワクチンについて2つのニュースを目にしました。

1つは「貼るワクチン」です。ほとんどのワクチンは注射で投与しますが、「貼るワクチン」はヒアルロン酸でできた数十から数百μmのマイクロニードルを剣山のように薄いシートに並べたもので、皮膚に貼るとワクチンを含んだ針が溶けて経皮吸収され免疫を誘導します。痛みがなく簡便、保存も容易であることから早期の実用化が期待されています。

2つ目はダニに刺されないようにするmRNAワクチンで、動物実験レベルで有効性が示されました（Sci Transl Med, 2021）。アメリカではダニが媒介するライム病が問題となっており、本邦でもツツガムシ病や日本紅斑熱、SFTSは生命を脅かします。ダニに刺されないためには長袖、長ズボンを着用することが基本ですが、ワクチンを接種してダニに刺されないようにするという発想はこれまでの常識を越えるものです。

ジェンナーがおよそ200年前に天然痘ワクチンを開発して以来、人類にとってワクチンは感染症に立ち向かう大きな武器になっています。今後も、新たなアプローチに基づくワクチンの開発が期待されます。

今年こそコロナ禍が終息し、十全同窓会の先生方の交流が再開することを願っています。

（濱口　儒人：記）